二〇二四年度　入学試験問題

国　語

第二回

【注　意】

・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
・問題は一ページから十ページまでです。
・解答はすべて解答用紙に記入してください。
・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
・記号・句読点がある場合は字数に含(ふく)みます。
・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。

洗足学園中学校

1 次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】は、どちらも西谷修『私たちはどんな世界を生きているか』（二〇二〇年）の一節で、「明治一五〇年の日本の国の形成と変容」というテーマの、主に日本の近代化の過程について論じたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

まず、明治期の変化の根本は、国際化だということですね。開国と言いますが、それ以後、日本で起こることは世界と繋がるようになったということです。

それを西洋的な国家間秩序からすると、日本を世界秩序の中の一主体というか、プレーヤーにするということです。

そのために日本は、幕藩体制のような形ではなく、一国としてまとまる中央集権国家を作らざるを得なかった。そのときに、何が国を一本化する軸になるかと言うと、天皇しかなかったということですね。

他の可能性もあったかもしれません。フランス革命に学べば、百姓一揆や★草莽自立のやり方で、そのまま共和制国家を作る道がないわけではなかった。けれども、それまでの武士中心の身分制社会だとか、どういう力の結集が幕府を解消できるかとか、現実の条件の中で、いろいろな利害確執をまとめて、一元的な国の★よりしろになりうるものが、結局、(1)それまで宙吊りの権威にされていた天皇しかなかったということです。

一つの政治権力というのは、単に力（暴力）だけではできなくて、力がつくる状況を安定させ、あるいはそれを秩序として支えるのは、まずは正統性の論理です。統治を★レジティメイトする、根拠づける、そして人びとを納得させるものは何か？　ということです。

だからこのときも、日本で一元権力をつくるために担がれたのが天皇家だったということです。

権力が持続的に維持されるためには、正統性が必要です。その正統性は、たいていその社会に通用する物語に支えられていて、ヨーロッパだと長い間、その役割をキリスト教あるいはローマ教会が果たしてきました。江戸時代まで天皇は実際の統治には関与しておらず、権威としては京都の簾の内でまったく形骸化していたけれども、それでも徳川将軍を誰が承認するのか、誰が将軍の権力の裏打ちになるのかと言ったら、形式的にでも帝によって、征夷大将軍（蝦夷征伐の武人）に任命されるという形をとってきたわけです。それによって、この国の統治を任されるという形をとることが、幕府の正統性の論理でした。

だから幕府を倒すという暴力（戦）の正当化も、皇室に政治権力を戻す（大政奉還）という大義で、天皇を中心とする国ができることになった。「錦の御旗」と言いますね。「官軍」です。それが実は、国際状況の、国際関係の中で要請された西洋型国家になるということに対する、日本のある意味では逆説的な対応だったわけです。国際情勢への対応というのは、まずは中央集権国家になるということ。そしてその集権国家が、西洋型の主権国家であって、同時に国民国家だということです。

主権国家とは、一定の領土を持ち、その領土を一括統治する法権力のもとにある国家です。その権力は、国内で最高の権力であって、それを支えるのは、領民がひとつの権力の下に同じ法制度に従って統治されるような国法制度です。

主権は王権がモデルになっていますが、その頃ヨーロッパではキリスト教の神が正統性の根拠でした。けれども、領土国家の基盤は実はそこに住んでいる人間ですから、その民は単なる領民ではなくて、国民になります。王権でさえ、国民の持つ力を基盤に立っているということです。

そうなると、国は国民が支えているということで、国民主権という考えが出てきます。国民が主権者だと言ったときには、無数の人びとが関わるわけだから、法的なフィクションになりますけれど、理念的には国家の原理は国民にあることになる。

すると、たとえ国王のいる国であっても、その国王は国民の代表であって、統治権力の正統性の元は国民にあると論理化される。それが近代国家です。そしてそういう論理に現実的な力を持たせていったのが、商工業の発達のような経済的活動であって、それが社会や地域の富を生み出す基盤になって、政治権力さえそれに支えられるようになる。

もちろんそこに、★ホッブズ以来の★社会契約論的な考え方が、国民主権を根拠づけるものとして準備されていました。経済活動は、いわゆる市場を場として展開されるから、それぞれの個人の活動を自由にしないと活発になりません。だから、個人の自由を尊重するとか、［A］その自由を国が支えるといった捉え方、考え方になっていくわけです。

そして国家主権というときにも、王制下で内と外に対して無制約な生殺与奪の権限を振るうということよりも、ナショナルなユニットとしての一

元制を体現することと、対他関係を代表するというのが主権の役割になります。

というのも、まさに近代日本がそうしてできたように、主権国家は国際的な相互承認関係の中でしか成り立ちませんから。

国民が国家のベースになると、国王がいても代表民主制のような制度を導入せざるを得なくなる。そして国事の決定に何らかの形で国民が参加する体制になります。正統性の観点から見れば、それが民主制ということです。

★ヘーゲルの哲学はそれを代弁しています。★主人と奴隷の弁証法のように、王がアクンリンしているように見えながら、実は王は何も生産できないから、奴隷に依存せざるを得ない。［B］実質的には奴隷が主なのだといった論理で、国家と市民社会を繋ぎました。

(2)近代国家の特徴とは、基本的には国民がベース、そしてその国民は原則的に対等だということです。そして、そういう条件を抱えて、それぞれの国は対外的には主権の相互承認秩序に従い、ひとつの国として振る舞います。そして外に出て異邦に出会うと、まず自分たちのルールで契約主体になれと要求する。まずは交渉ができて、その交渉結果をお互いが法として守る。そういう秩序の主体であれということです。

［C］当時の日本の場合、西洋諸国はどこと交渉すればいいのかわからない。幕府と交渉しろというが、どうもまとまっていなくて長州藩や薩摩藩は別の態度をとる。それでは、信用が置けないから、対等の交渉相手とは認められない、ということで、日本に不平等条約を押しつけてくる。

なにが不平等かと言うと、通商するにしても関税をこちらでは決められない。［D］西洋人の行動に対して日本には裁判権がない。居留地を与えたらそこは日本の法が適用されない。治外法権というものですね。その条件を呑まないと、植民地にして「文明化」するしかない、ということになります。それで日本は――というより幕府ですが、薩長にしても攘夷を主張してもできないから、まあ同じことでしょう――不平等条約を受け入れざるを得なかった。それが当時の西洋諸国のやり方です。

（西谷修『私たちはどんな世界を生きているか』）

★草莽……官職に就かず、民間に留まっている人のこと。「草深いところ」という意味で、幕藩体制が動揺する頃に、政治的主張をする民間知識人や脱藩浪士たちが自らを称して言った。

★よりしろ……神霊が寄り憑く対象物のこと。

★レジティメイトする……合法化・正当化する、道理に合ったものにする、という意味。

★ホッブズ……イギリスの哲学者（一五八八～一六七九）。

★社会契約論的な考え方……人間は自己保存のための自然権を持っているが、万人がそれを行使する（万人の万人に対する闘争）と、争いが絶えなくなり危険だから、自然権を放棄し主権者に委ねるとともに政治機構を作り、社会を安定させるという考え方。ここでは、人々の自由は国家に預け、国家が人々の自由を保障する、といった意味。

★ヘーゲル……ドイツの哲学者（一七七〇～一八三一）。

★主人と奴隷の弁証法……ヘーゲル哲学において最も多く論じられた主題の一つ。「主人」の生活は「奴隷」の労働に依存しているから、やがて「奴隷」は自立を果たし、「主人」は自立を喪失する。そのように両者の関係は入れ替わる。こうした過程を通じて人間の諸関係は形成され、改変されていくという論理のこと。

【文章Ⅱ】

日本はあらゆる形で翻訳語をつくりました。それまでの日本語にない言葉を、漢字二字を組み合わせて何とか対応する日本語をつくる。その造語は、初めは人びとに馴染まないけれど、学校教育が始まったので、そこで教えることで日本の通常語のなかに入ってゆきます。こうして、西洋由来のあらゆることがらが日本語で普通に語れるようになったのです。

たとえば「社会」という言葉。それまで日本には society なんていう観

念はなかった。けれども、訳者たちがいろいろ考えて、「人が集まっている」ということだよな。でも集まるといっても、ヨーロッパには教会があるだろう。そうか、日本には社があるじゃないか。ならば、人が集まっているというのは『会』でどうだ」とか言ってつくります。それをやったのは漢学や蘭学の素養があった人たちで、★西周はその代表です（これについては、★つとに有名な★柳父章という人の『翻訳語成立事情』という本があります）。

でも西洋語の society には individual（個人）とか contract（契約）とかの関連語があります。(3)だから「社会」と言われても、そのまま society を写せるわけではない。なんじゃ、それは、と言われて説明するときには、「まあ世の中ってことかな」とか言わざるを得ないから、そうか、とりあえず、というのでたいていは「世の中」という理解をベースに、「社会」というのが考えられるようになる。

それで、社会という言葉も、society の元の意味とか、他の言葉との関連よりも、「世の中」というイメージのほうが浸透していく。だから日本語で「社会」と言ったときに、今では正確に society の訳語か、一対一で対応するのかと言ったら、「どうかなあ？」ということになるわけです。翻訳とは言っても、西洋諸語同士のようにラテン語を共通のベースにしているといった条件がないので、これは避けがたいことです。

ただ、ともかく西洋概念を全部日本語で置き換えられるようにおびただしい訳語をつくった。そのために西洋の知のコンカンだった哲学や科学も、全部日本語でできるようになる。明治の初め頃は、大学の教師のほとんどは、お雇い外国人です。法学はドイツ語やフランス語で行われるものを学生は必死に理解しようとした。その学生たちは留学して、一生懸命勉強して、西洋の言葉と知識を持ち帰ってきて教師になる。そうなる頃には、日本語で教育を行えるようになります。夏目漱石もそうして教師になりますが、そのために今度は外国人教師が失職するのですね。

哲学で言うと、明治四四（一九一一）年に★西田幾多郎が『善の研究』を出します。これは日本語で哲学した最初の本で、まさに同時代の西洋哲学の核心にもふれています。それが、四〇年間かけて日本語の大カイゾウをやってきた成果の現れだといってもいいでしょう。日本語の大カイゾウにはもうひとつ「国語」形成というのがありますが、そのあたりは★イ・ヨンスクさんたちの業績（『「国語」という思想』他）を参照してみてください。

ともかく(4)西洋の文物がすべて日本語の中に取り込まれて、誰もが「国語」のうちで全★智識にあたることができるようになった。これは他に類のない日本近代の特徴です。

(5)ではなぜ、他のところではできなかったのに、日本では翻訳ができたのか。

たとえばアフリカでは西洋各国語の浸透は広範で、多くの地域でコウヨウ語になっています。地図で見ても、英語圏やフランス語圏に分かれていますね。それは、もともとこの地域が基本的に無文字社会だったからです。何かの蓄積が書き物として残っていない。歴史化されていないということです。集団の記憶を担う役割の人たちはいますが、その人たちが死に絶えれば蓄積はなくなります。文字を書いて残しておくと、後の人はそれを足場にしていろいろな制度のベースがつくれます。

書かない文明にも、ダンスのように書くこととは別の刻み方があったりしますが、どうしても書く文明の蓄積に潰されるところがある。事実上、書いたものを頼りに強い信仰体系ができて、自分たちの正しさを信じられるところは圧倒的に強くて、アメリカ（という名前をつけて消された世界）も、アフリカもそれで潰され、浸透されてしまいます。

日本の場合は、早くから中国から漢字が入っていました。その漢字を通して中国を知ると同時に、それを自分たち流に活用して記録を残すことまでしていたのです。だから、そのおかげで、西洋の言葉も翻案転記できるようになっていた。すでに江戸時代の初めから、蘭学がせまい範囲だけれども重要な学問になっていて、『解体新書』という医書も訳されていました。そのための道具として、漢学使用の蓄積があったのです。

それからもう一つ。★ポルトガル人が初めて日本に来たとき、日本には南蛮図屏風のように、どんな人たちが来たのかを克明に描き出す作業がありました。つまり、向こうから「異人」が来たとき、単に見られ観察される対象になるのではなく、他者を他者として認知し、把握しようという姿勢があったわけです。

たとえばアメリカ大陸の先住民たちを見てみると、海の向こうから白い神が来て、自分たちは滅びるといった伝承はあったようだけれども、コロンブスたちがどんな船でどんなふうに来たかを描いたものはありません。逆に、西洋人たちは、上陸やそのシンテンチ、先住民のことを、自分たちのイメージに合わせて――たとえばギリシア・ローマの神話風に――描いたりしています。

日本の場合は克明に描き出す力があった。古くから中国経験があり、東アジア関係があったからでしょう。それで西洋人が何を考えているのかを自分たちの間で共有するために、日本語で汲み取り、吸収し、分かち合おうとした。

実際、幕末の頃にもっとも流布したのが『万国公法』という、アメリカの国際法の教科書です。このことも、この膨大な翻訳作業が何であったかを、端的に示しているといえるでしょう。他者として受け止めて、自分たちで国際ルールから理解共有しようとする意識があったということです。

（西谷修『私たちはどんな世界を生きているか』）

★西周……日本の啓蒙思想家（一八二九～一八九七）。
★つとに……早くから、以前から。
★柳父章……翻訳語研究者・比較文化論研究者（一九二八～二〇一八）。
★西田幾多郎……日本の哲学者（一八七〇～一九四五）。
★イ・ヨンスク……社会言語学者（一九五六～）。
★智識……「知識」と同じ。
★ポルトガル人が初めて日本に来たとき…一五四三年、ポルトガル人を乗せた中国船が種子島に漂着したことを指す。鉄砲（火縄銃）の技術が伝わった。

問一 ――(1)「それまで宙吊りの権威にされていた天皇」とありますが、「天皇」が「それまで宙吊りの権威にされていた」とはどういうことですか。三行以内で説明しなさい。

問二 ――(2)「近代国家の特徴とは、基本的には国民がベース、そしてその国民は原則的に対等だということです。そして、そういう条件を抱えて、それぞれの国は対外的には主権の相互承認秩序に従い、ひとつの国として振る舞います。」とありますが、このことを言い換えた説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 領土国家の基盤はそこに住んでいる人間であると見なす。国家の現実的な力は国王の代表者である国民が持つというフィクションを構築する。また、国家間同士の関係は、相互に定められたルールに基づいて契約を結ぶ。

イ 国家のベースは国民にある。従ってその国家に国王がいても国事の決定には何らかの形で国民が参加をする。この主権国家は、対外的には市場を舞台として展開される相互交渉の過程を経て国家間秩序の中に編成される。

ウ 国家とは主権国家のことである。それは一定の領土とその領土を一括統治する同じ一つの法権力の下にある国家のことで、主権者はその領民である国民となる。そして主権国家は、国際的な相互承認関係の中で成り立つ。

エ 国民国家は国家と市民社会の間に挿入されるフィクションを前提とする。その上で対等な立場の個人がそれぞれのルールに基づいた契約主体となる。このように、相互交渉の結果、多国間で国際的な承認が得られていく。

問三 ――(3)「だから『社会』と言われても、そのままsocietyを写せるわけではない。」とありますが、その理由を説明したものとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「society」や「individual」や「contract」を日本語に置き換えることは、どうしても無理があるため、それまで日本に流通していた概念をうまく当てはめ、学問として成り立たせるしかなかったから。

イ 西洋語の「society」を一対一で日本語に翻訳する場合、「individual」や「contract」といった関連語があり、それらの影響により、「世の中」という理解をベースにして人々の間で考えられていくから。

ウ 漢学や蘭学の素養のあった人たちは、西洋の知識と言葉を持ち、大学で教えるようになるものの、「society」を「individual」や「contract」などの関連語と結びつけて考えることはできなかったから。

エ 日本の翻訳語は、ラテン語という共通のベースがないために、「society」の元の意味にまで遡ったり、「individual」や「contract」といった他の関連語と合わせて考えたりすることには限界があるから。

問四 ――(4)「西洋の文物がすべて日本語の中に取り込まれて、誰もが『国語』のうちで全智識にあたることができるようになった。」とありますが、そうしたことはどのようなことによって「できるようになった」のですか。文末を「…こと。」にして、三行以内で説明しなさい。

問五 ――(5)「ではなぜ、他のところではできなかったのに、日本では翻訳ができたのか。」とありますが、筆者はこれに対してどのように答えていますか。文末を「…から。」という形にして三行以内で説明しなさい。

問六 [A]～[D]に入れる語としてふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選びなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ところが　イ それに　ウ あるいは　エ だから

問七 ――ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問八 国語の授業で、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を合わせて読み、意見を述べ合う活動がありました。先生の説明を聞いた後、発言したAさん～Dさんのうち、本文の筆者の考えを正しく理解していないと思われる一人は誰ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

先生　本文の筆者は、西洋の思想や制度が本質的にどういうものかを丁寧に説明しつつ、その上で日本の近代化の中心がどういう所にあったのかをわかりやすく述べています。特に筆者は、【文章Ⅰ】では西洋の政治制度の思想的な側面と、明治期の日本の政治的状況を述べ、【文章Ⅱ】では日本が近代化を果たした大きな要因は何だったのかを述べています。皆さんは、どういう感想を持ちましたか。

ア Aさん　明治期の日本が西洋的な国家間秩序の中に関係づけられたという考え方は、例えば「日清戦争」「日露戦争」などの「戦争」という語に見られると思いました。「応仁の乱」や「関ヶ原の戦い」のような「乱」や「戦・合戦」のイメージとは明らかに異なります。

イ Bさん　『解体新書』を例に、日本がすでに西洋の言葉も翻案転記できるようになっていたという見方は、当時の日本が置かれていた医学事情が大きいと思いました。日本が急激に近代化し、やがて戦争に敗れていく背景には、江戸時代の医学事情の変化もあったのでしょう。

ウ Cさん　ポルトガル人が初めて日本に来た時、日本人は彼らのことを克明に描き出す力があったという捉え方に大変興味を持ちました。例えば、彼らの持っていた見慣れぬ火器に興味を持ち、製法を学び、自分たちで鉄砲を作れるようになっていったことがそれにあたります。

エ Dさん　幕末の頃に最も流布したのが『万国公法』というアメリカの国際法の教科書だったという筆者の指摘は、他者との関係性を理解しようとする日本の姿勢を語っていると思いました。日本はこのおよそ千年前に、中国(唐)に学び、関係性を理解しようとしていましたから。

2 次の文章は、青山美智子『月の立つ林で』の一節です。これまでの主なあらすじを読んだ後、本文を読んで後の問いに答えなさい。

これまでの主なあらすじ

北島（旧姓南沢）睦子は食品メーカーに勤めていたが、三年前に二十五歳で同僚（剛志）と結婚して会社を辞める。もともとアクセサリー作りが趣味の睦子は、作ったものを友人にプレゼントしたり、フリーマーケットで販売したりするのが好きだった。やがて睦子は週に三日ほどのパートタイムの仕事をしながら、ゆとりができたときには、ハンドメイド通販サイト「ラスタ」に「ｍｉｎａ」というブランド名で出店するようになる。三ヵ月ほど経ったとき、急に注文が殺到し始め、大きな会場を使ったハンドメイドのイベントや展示販売にも声がかかるほどになった。睦子の作品は勢いに乗っていた。

数日後、インスタグラムのＤＭを通して問い合わせがあった。

私の作品を気に入ってくださった出版社から、ワイヤー・アクセの作り方を本にしませんかというオファーだった。まさか。［Ⅰ］信［Ⅰ］疑ですぐには喜べなかった。

そのあとメールアドレスを交換し、やりとりをした。メールをくれた編集者は篠宮さんという女性だった。彼女の企画書は実によく練り込まれていて、私の作品のどんなところに惹かれたか、読者さんに何を伝えたいかが熱く語られていた。

そしてもしよろしければ、一度お会いしてお打ち合わせしたいとのリクエストがあった。

私は企画書を三度ほど熟読したあと、ぜひお会いしたいですと返信を打った。するとそのまた返信がすぐに来て、スケジュールの打診をされた。仕事が早い。熱意を感じて好感が持てた。

日程が決まると、篠宮さんの文面がだいぶくだけてきた。メールの最後に「［Ⅱ］ですが、編集部のスタッフの持ち回りで、ポッドキャストの番組を配信しています。もしよろしければお聴きください」と追伸が書かれている。

アプリを入れたりしなくてもパソコンから「グーグル・ポッドキャスト」でネット視聴できると補足説明があり、ＵＲＬが載っていた。

クリックすると、『編集女子のありがトーク』というタイトルが現れた。「エピソード」として配信の一覧が並んでおり、それぞれに三十分程度でしゃべっているようだった。

ポッドキャストの存在は知っていたけど、実際に耳にするのは初めてだった。篠宮さんであろう編集女子の楽し気なトークを興味深く聴いたあと、他にはどんな番組があるのだろうと、私は「番組を探す」のバーをクリックした。

トップに「話題」があり、その下には、多種多様なジャンルがカテゴリー分けされている。社会、文化、教養、アート、ビジネス、テクノロジー、フィットネス……。配信は誰でも無料でできるらしい。あらゆる方面で、こんなにも話したがっている人がいるのだ。

その中で比較的関心がある「サイエンス」のカテゴリーを開いた。天文、気象、植物、生物。講座っぽいもの、漫画チックなもの、あきらかにふざけているもの、配信のカラーはさまざまだ。［Ａ］眺めていて、ふとひとつのタイトルに目が留まった。

『ツキない話』。配信者はタケトリ・オキナとある。

ネイビーブルーの無地に真っ白な手書きの文字というジャケットのシンプルさが、逆に印象的だった。タイトルと配信者名の組み合わせにもなんとなく惹かれて一番上の配信をクリックすると、穏やかな男性の声が流れてきた。

「竹林からお送りしております、タケトリ・オキナです。かぐや姫は元気かな」

なるほど、竹取物語を下地にしているのだ。私は耳を傾けた。軽い雑談のあと、タケトリ・オキナはしみじみと語り出した。

「最近よく、思うんです。僕たちがいつも月を見ているのと同じように、月にいたら地球を見ているんだろうなって」

うっとりするように、彼は言う。

「アポロ８号が撮影した★『地球の出』の画像を見たことがある人も多いと思います。月の地平線の向こうに地球が浮かび上がっている、あれです。月から見る地球は、地球から見る月の四倍で、かなりの大きさで見ることができるんです。ご存じの通り、地球って青々としていますよね。それはもう、たとえようのない美しさで。たとえば月に文明を持たない生物がい

て、地球がどんなところかわからなくて、ただこの青い星を眺めているだけだったら何を思うでしょう？　地球とはいったい、どんな美しい世界なんだろうって、ただポジティブなイメージしか抱かないような気がします。平和で、見目麗しい女神がいて、何もかもが満たされている楽園のような」

そこでタケトリ・オキナは深く息をついた。

「遠く離れているから、わからないから、良い想像だけで夢見ることができるっていうところもあるのかもしれませんね。もちろん、わかっていても、やっぱり『地球の出』って見てみたいなと思うけど。外から自分の星を俯瞰したらまた違うことを感じるのかもしれないし」(1)

なかなか、言うことが深い。月に関する豆知識も面白いし、彼の着眼点も興味深かった。「エピソード」として一覧になっている配信リストを見ると、タケトリ・オキナは毎朝七時、十分間の配信を続けているようだった。もう二百ほどになっている配信を私は少しずつたどり、その声を聴きながらパソコンであまり得意ではない事務作業をした。

細かい字をたどっているせいで、目が乾いてきている。最近、ドライアイに悩まされていた。苦手な目薬を買ってみたが、どうもしみる。なるべくソフトなものを選んだつもりだけど、私にはちょっと刺激が強いらしい。

それでも潤いを与えなければと点眼をし、私はぎゅっと、目を閉じた。

翌週、出版社を訪れた。

編集者の篠宮さんは巻き髪の可愛らしい女性で、二十四歳だといった。

メールの文面に輪をかけて、快活でアクティブだった。

「ｍｉｎａさんって、本名がミナってお名前なんですか」

名刺交換をしたあと、彼女は a屈託なくそう言った。

「いえ、旧姓の南沢から取ってるんです。結婚したら北島になりました」

「あら、じゃあ、南から北へ」

篠宮さんは何やらウケて笑っている。私も、そうなんですと笑った。篠宮さんはさらに食いついてくる。

「ご結婚されてどれくらいなんですか」

「三年です」

そう答えると、篠宮さんは大げさなくらいに「いいなあ」と言ってのけぞった。

「それぐらいがいちばんいいじゃないですか。夫婦として安定してきたってところで。うらやましいですよ。私も早く結婚したいんですけど、ぜんぜん出会いがなくて。ｍｉｎａさん、才能があって、売れっ子で、旦那さんがいて、いいなあ」

それが本心かは、正直わからない。リップ・サービスみたいなものかもしれなかった。私は b取り繕った笑顔で話題を変えた。

「このたびは、お声がけいただきありがとうございます」

篠宮さんは「いえいえ、こちらこそ」と手をぱたぱたと振る。

「ｍｉｎａさんのワイヤー・アクセ、愛があるんですよねえ。私、すごく好きです」

篠宮さんが持ちかけてくれた本の企画はムックと呼ばれる雑誌のような形態の書籍で、この出版社ではハンドメイドシリーズとして人気らしかった。

これまで発行されたいくつかの既刊がテーブルに並んでいる。刺繍、ビーズ、とんぼ玉、羊毛フェルト。モノづくりを愛する人のための本たちだ。それぞれに、人気作家が初心者でもトライできそうなノウハウをレクチャーしている。

しかしその後半部分は作品集となっていて、それは本人にしか生み出せないであろうと思われる高度なものばかりだった。私が驚いていると、篠宮さんは言った。

「読者にとって、これなら自分にもできるんじゃないかと思えるページと同じぐらい、自分にはとうてい及ばないと敬意を抱けるような非現実的なページも必要なんです。ただ憧れるっていう、その喜びが至福だったりするんですよ」

そして彼女はさらに、手前にあった一冊を私のほうに向けた。

「たとえばこのリリカさんって、私が担当したんですけど」

切り絵の表紙だ。

手に取って開くと美しい紙細工がたくさん現れて、私は目を奪われた。花、動物、建物、街。本を開くと飛び出してくる仕掛けのアートも載っている。

紙一枚で、こんなにも豊かな表現ができるのか。繊細であったりダイナミックであったり、ワイヤー・アクセにも通ずる無限の可能性が広がっていた。

「……素敵」

私がつぶやくように言うと、篠宮さんは言った。

「リリカさん、ホントにすごい方なんです。イギリスのアートコンクールで賞も取ってらっしゃるんですよ。ああ、来週、都内で展示会があるんですけど、ご一緒しませんか」
「ええ、ぜひ！」
私はいつになく前のめりになった。作品を直接見てみたいと思ったのだ。そしてできることなら、この人に会ってみたいと。
「それじゃ、リリカさんが在廊されているお時間をうかがっておきますよ。少しでもお話しできたら、ｍｉｎａさんの本の参考になるかもしれないですし」
篠宮さんはそう言って、手帳にあれこれと書き込んでいる。
……ｍｉｎａさんの本の参考に。
そう言われてあらためて、この出版企画がリアルに感じられた。(2)私は急に開けてきた新しい世界に胸をときめかせながら、リリカさんの切り絵アートをじっくりと眺めた。
ｍｉｎａの名前で、本が出る。
出版社を出てからも、それは私を高揚させ続けた。作品が売れることとはまた違う喜びだった。
帰宅後、私は食卓に小さな花を飾り、久しぶりに手の込んだ煮込み料理を作った。自分への祝いのつもりで。
そして、もうひとつ、淡い期待があった。普段私のアクセサリー作りに興味のない剛志でも、本の出版となれば喜んでくれるだろう。
剛志は定時で帰ってきた。私が「おかえり」と言うと、コートを脱ぎながら笑った。
「ごきげんだね」
私は鍋をかきまわしながら、ゆっくりと告げる。
「あのね、出版社から連絡があって」
「出版社？」
うん、と私はうなずき、鍋の蓋を閉じて剛志に向き直る。
「私の本を出しましょうって、オファーがあったの」
「へえ」
剛志は短く答えると、ちょっとだけ目を見開いた。
さすがに少し驚いている様子だったけど、彼からそれ以上のコメントはない。私は畳みかけた。

「初心者でも作りやすい方法とか、教えるページがあるの。新作も載せてもらえるみたいだし、できれば春に出したいって言うから、急がないと」
剛志はネクタイに手をかけながら、［　Ⅲ　］をひそめた。
「大丈夫なの？　いいかげん働きすぎじゃない」
そう言われて、上がりっぱなしだったテンションが一気に下がった。羽根のようにふわふわと舞い上がっていた心が、萎えて重く沈んでいく。
「……なにそれ」
私はシンクの縁に置いた手をぎゅっとにぎった。
「おめでとうぐらい、なんで言えないの？」
自分でもびっくりするような低い声が出ていた。
剛志は私をなだめるかのように片手を上げる。
「いや、それはそう思うけど。根詰めすぎじゃないの」
「だって、せっかくこんないい話がきたのに。今がんばらなきゃ、忘れられていっちゃうじゃない」
「だからって、体を壊したら元も子もないだろ」
「たいした趣味も持たないあなたにはわからないだろうけど、アクセサリー作家なんて星の数ほどいるの。その中からこんなふうに認めてもらえて求められるって、本当にすごいことなのよ！」
すごいことなのよ、と口からこぼれ出た言葉に羞恥の気持ちがまとわりつく。自分でこんなこと、言いたくなかった。剛志が讃えてくれさえすれば、みんなのおかげだと謙虚になることができるのに。
剛志は黙ってしまった。私も黙る。
「……シチュー、作ったから適当に食べて。私、今日もこれからアトリエに行くわ」
私はキッチンを出た。
もうだめかもしれない。私たち夫婦は。
分かり合うことなど、できないのかもしれない。
剛志といると、(3)こんなみっともない自分が顔を出してしまう。悲しかった。
才能があって売れっ子で旦那さんがいて、いいなあ、と私をうらやましがった篠宮さんのことを思い出す。
月から見える地球は、さぞかし美しいだろう。タケトリ・オキナの言うように、月に生物がいたら、あの青い星はどんな素晴らしい世界なんだろ

うと憧れるに違いない。

でも実際には、この地球はどこもかしこも汚れて破壊されている。意味のない戦いは止まず、わけのわからない病がはびこって、いつも誰かが傷ついて泣いている。

遠いから、知らないから、きれいなことしか想像しないですむのだ。

それはそれでいいじゃないか、という気がした。だとしたら(4)私はその夢を人々にささげよう。ただ美しい世界を。篠宮さんの言う、[(5)]を。

そのためにも、私にはあえて孤独が必要なのだ。

そう思いながら私は家を出て、アトリエに向かった。

（青山美智子『月の立つ林で』）

★『地球の出』……アポロ8号ミッション中の一九六八年、宇宙飛行士ウィリアム・アンダースが撮影した地球の写真のこと。「史上最も影響力のあった環境写真」として知られている。

問一 (一) [Ⅰ]に入れる漢字一字を書きなさい。

(二) [Ⅱ]には、「あってもしかたがないものや、よけいなつけ足し。」という意味の言葉が入ります。漢字二字、またはひらがな三字で書きなさい。

(三) [Ⅲ]には、体の部分を表す言葉が入り、「いやそうな顔をした。」（＝「[Ⅲ]をひそめた」）という意味の慣用句になります。漢字一字、またはひらがな二字で書きなさい。

問二 ――(1)「なかなか、言うことが深い。」とありますが、「タケトリ・オキナ」はどういうことを言ったのですか。三行以内で説明しなさい。

問三 ――a「屈託なく」・b「取り繕った」の意味としてふさわしいものを、それぞれア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

a「屈託なく」

ア わだかまりがとけることもなく
イ 何かを気にしたりすることなく
ウ もどかしくてはがゆい心もなく
エ 思いや考え方を変えることなく

b「取り繕った」

ア その時だけなんとかうまくごまかした
イ 努力してわざとそのように形づくった
ウ きらわれないように配慮の行き届いた
エ 相手の気持ちをよい方向にみちびいた

問四 ――(2)「私は急に開けてきた新しい世界に胸をときめかせながら」とありますが、このときの「私」の心情を三行以内で説明しなさい。

問五 ――(3)「こんなみっともない自分」とありますが、この場面では、どういうことが「みっともない」のですか。三行以内で説明しなさい。

問六 ――(4)「私はその夢を人々にささげよう。」とありますが、ここでの「私」の心情の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かりに才能や夫がいる生活があったとしても、世の中を生きる上では不必要なことだから、全てを人々と共有しようと強く決意する気持ち。

イ たとえ夫婦生活がうまくいかなくなったとしても、人々に喜びを与えるアクセサリー作家として高みを目指していこうと強く決意する気持ち。

ウ もしも剛志と分かり合えることがあるならば、今までの生活を割り切り、順風満帆で理想的な夫婦関係を演じるだけだと強く決意する気持ち。

エ 万一、自分のアクセサリー作品が人々から愛されなくなったとしても、夢を与え続ける作家として生涯を送っていこうと強く決意する気持ち。

問七　(5)　に入れる八字の表現を本文から抜き出して答えなさい。

問八　(一)　A　に入れる語として最もふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　するすると　イ　ずるずると　ウ　ゆるゆると
エ　のろのろと　オ　きらきらと

(二)　次の表現の　B　～　D　に入れる語として最もふさわしいものを、《語群》の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

・彼はいつも威張っているのに、自分より偉い人の前では　B　頭を下げている。
・彼女は不満に思うことがあるらしく、いつまでも　C　と文句を言っていた。
・悲しい小説を読んで、涙が　D　と落ちてきて本がすっかり濡れてしまった。

《語群》

ア　ぶらぶら　イ　すらすら　ウ　ぐずぐず　エ　ぺこぺこ
オ　はらはら　カ　むかむか　キ　よろよろ　ク　さらさら

問九　本文の表現の特徴や効果を説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　インスタグラムのDMから始まった編集者篠宮さんとのやりとりの描写は、メールの最後に付けられたポッドキャストの番組によって、その後のプロセスがスムーズに運ばれていくことを予感させるものとなっている。
イ　細かい字をたどっているせいで目の乾きに悩まされる「私」が、やや強い刺激のある目薬を買い、点眼して潤いを与えようとする箇所からは、アクセサリー作りがあまりはかどっていないことが暗示される。
ウ　夫剛志と口論になる場面では、「羽根のようにふわふわと舞い上がっていた心」、「重く沈んでいく」という比喩が用いられており、それによってせっぱ詰まってお互いに感情的になってしまう状況が鮮明になっている。
エ　物語内に挿入される「タケトリ・オキナ」の語りは、美しい地球の表の部分と裏の部分を考えさせるもので、華々しい世界に憧れつつ、身近なところでは辛い思いをしている「私」の生き方を象徴している。

問十　本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　篠宮さんとのやりとりの後、帰宅した「私」は、本の出版の話をすれば夫剛志も自分の仕事に興味を持ってくれるかもしれないと期待していた。
イ　帰宅した後「私」は、久しぶりに手の込んだ煮込み料理を作ったが、それは夫からせめて「おめでとう」の一言を言ってほしかったからである。
ウ　「私」が本の出版の話をしたとき、夫剛志は少し驚いて興味を示したので、畳みかけるように語り、急がなければならない事情を強く訴えた。
エ　夫に傲慢な態度をとってしまった「私」は反省するとともに、せめて自分を讃えてくれさえすれば、謙虚になることができるのにと夫に伝えた。